

## 邪馬台国の時代⑦ ～末盧国から伊都国へ～

河村哲夫

### 末盧国から伊都国へのコース

大きく回り道をしてしまったが、末盧国から伊都国に向かうコースに戻りたい。

帯方郡の役人たちの一部が船から降りて、呼子・大友・湊・相賀・佐志という陸のコースをたどったであろうことについては、すでに述べたとおりである。

呼子から佐志まで約 13 キロ。佐志から松浦川まで約 7 キロ。計 20 キロほどの距離となる。ほぼ 1 日の距離であろう。そして、『魏志倭人伝』は、

「(末盧国から) 東南に陸行すること五百里にして、伊都国に到る」

と書いているが、このことについて検証してみよう。

まず、『魏志倭人伝』は「東南」と書いているが、伊都国(糸島)は末盧国(唐津市)の東北の方角にある。東南ではない。地軸の傾き 23.4 度を加味したとしても、この関係は変わらない。

下図を見てもわかるとおり、曲がりくねった道を、しばしば方角を変えながら歩かざるを得ない。

この区間で東南の方向に歩くのは、「呼子→相賀」と「佐志→松浦川」のみである。後半はほとんど東北の方角である。

『魏志倭人伝』は、呼子から最初に一步踏み出した方角を記載しただけではないのか、という疑問すら湧いてくる。

いずれにしろ、全体としては、東の方向に進んでいる。血眼になって議論するほどの問題ではない。



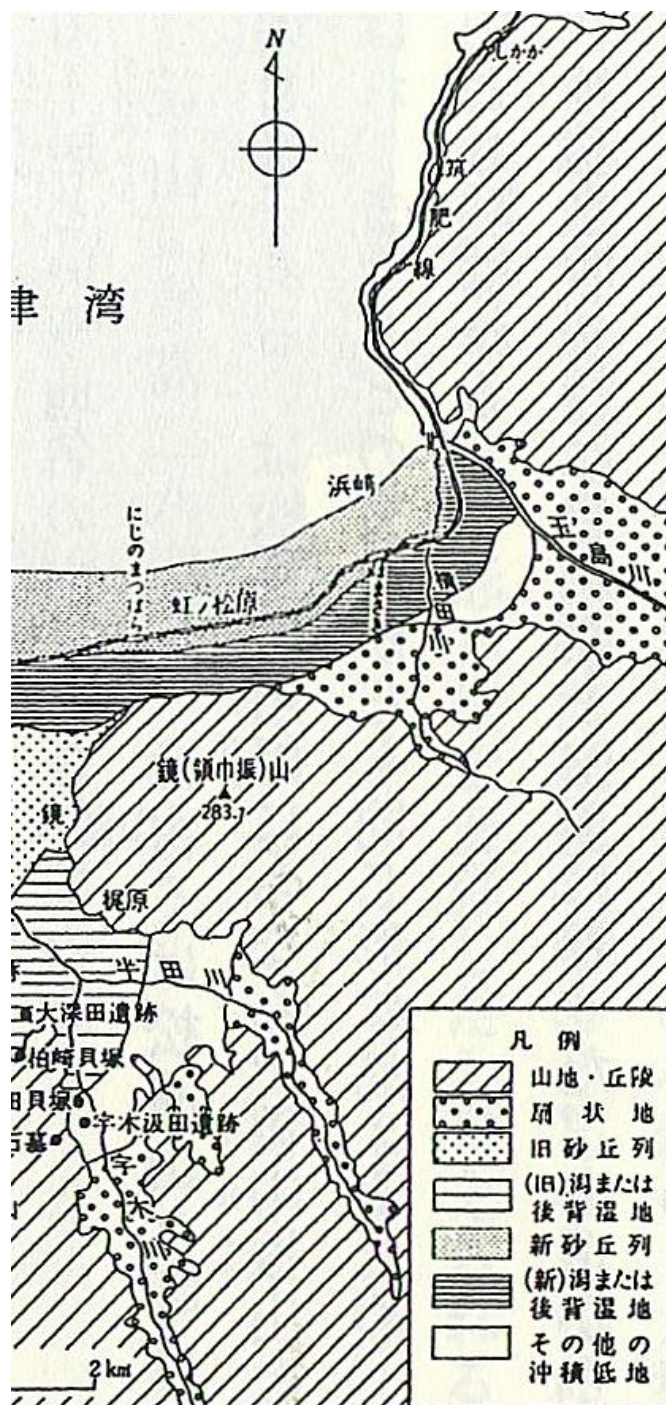
次に、帯方郡の役人たちは、具体的にどのようなコースで伊都国をめざして進んだであろうか。

この当時、唐津から海側を歩いて糸島市へ行くことはきわめて困難であった。

下図のとおり、現在では海岸沿いに鉄道(筑肥線)と国道が整備されているが、古代においては山際まで海が迫り、しかも鏡山の北側には潟地と湿地が広がっていた。

神功皇后一行も、鏡山の北側の潟地で船が身動きできなくなったという伝承が残されている。

帯方郡の役人たちは、海沿いのルートをとることができなかったはずである。



### 古代官道

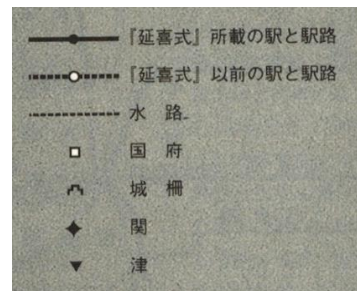
それではどのようなルートをとったのか。参考になるのが、古代官道のルートである。

7世紀以降のいわゆる律令時代、中央と地方国府を結ぶ幹線道路が整備された。

九州においても、大宰府を中心に道路網が整備された。



□は大宰府



『日本古代道路事典』(八木書店)より(一部改変)

土木機械がまったくなかった時代であるから、人力に頼るしかなかった。できるかぎり自然の地形を利用し、古代からの伝統的な人道を活かしながら整備していったであろう。

末盧国——唐津においても、伊都国(糸島市)に抜ける官道が整備された。やはり、危険な海岸線を避け、玉島川の大村駅(おおむらのうまや)から怡土(いと)郡の佐尉(さい)駅へ山道で抜けるコースが整備された。

この官道の基礎となった山道こそ、邪馬台国時代の帯方郡の使者たちがたどったルートと重なる可能性が高いのではないか。山道の場合は、とりわけ地形的要因に制約され、自由度が低い。

末盧国側の大村駅は玉島川右岸の藤原広嗣を祭る大村神社(唐津市浜玉町五反田)あたりにあった。そこから玉島川沿いに少し上り、柳瀬あたりから左に曲がって城山(377メートル)の東麓を進み、十坊(とんぼ)山(535メートル)と浮嶽(805メートル)の間の山道を登り、白木峠を越えて伊都国側に抜ける。



●は大村駅

伊都国側の最初の駅は、佐尉(さい)駅である。

ただし、その所在地については、次の3説があって確定していない。

①	「鹿家(しかか)」説	糸島市二丈鹿家	海岸近くに所在	×
②	「吉井」説	糸島市二丈吉井	最も自然な山道ルート	○
③	「佐波(さなみ)」説	糸島市二丈福井	一駅の区間が長く、深江駅に近すぎる。	△





現地調査をした限りでは、上記 3 説のうち、②の「吉井」説が最も有力に思える。道路整備やゴルフ場の造成などで大きく地形が変化している箇所もあり、100 パーセント断定はできないが、今のところこの説を第一候補としたい。

佐尉駅の次は、深江駅(糸島市二丈深江)である。

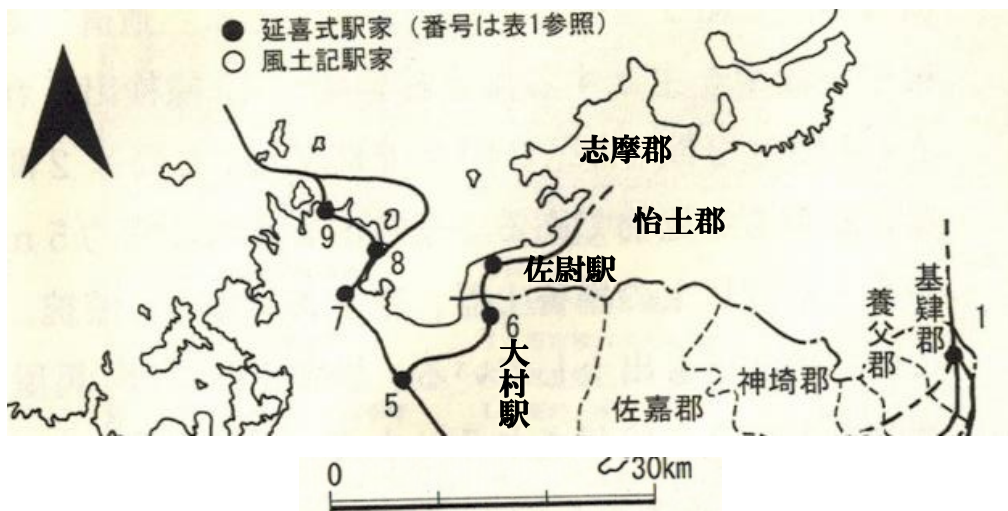


表1 肥前国風土記・延喜式にみる郷、駅数等

肥前風土記	郡	基肆	養父	三根	神埼	佐嘉	小城	松浦	杵嶋	藤津	彼杵	高来	11
	郷	6	4	6	9	6	7	11	4	4	4	9	70
	里	17	12	17	26	19	20	26	13	9	4	21	187
	駅	1		1	1	1	1	5	1	1	2	4	18
	烽		1		1		1	8		1	3	5	20
備考	姫社郷	鳥巢郷 日理郷 狭山郷	物部郷 漢部郷 米多郷	三根郷 船帆郷 蒲田郷 宮處郷 寺1	寺1			値嘉郷 賀周里 逢鹿駅 登望駅		能美郷 託羅郷	浮穴郷 周賀郷		城1 寺2
延喜式	駅名	基肆駅	×	切山駅	×	佐嘉駅	高来駅	盤水駅 大村駅 賀周駅 逢鹿駅 登望駅	杵嶋駅	塩田駅	新分駅	船越駅 山田駅 野島駅	15
図番号		1		2		3	4	5 6 7 8 9	10	11	12	13 14 15	

『日本古代道路事典』(八木書店)より

以上をまとめれば、次のとおりとなる。

末盧国から伊都国まで					
距離	日数	『魏志倭人伝』	1里	備考	
呼子→佐志→松浦川	20 km	1日	末盧国		
松浦川→大村→吉井	15 km	1日	↓		山越えの道
吉井→深江→平原遺跡	15 km	1日	伊都国		
計	約 50 km	3日	500里	約 100m	

呼子を起点に、1日 15～20 キロメートル歩いたとして、末盧国の呼子から伊都国の平原遺跡あたりまで3日程度要することになる。

前号で末盧国から邪馬台国までを6～7日と試算したが、3日というのは、まずまずの日数であろう。

### 伊都国

伊都国について、『魏志倭人伝』は次のように書いている。

「(末盧国より)東南に陸行すること五百里にして、伊都国に到る。官を爾支(にぎ)と曰(い)い、副を泄謨觚(せまこ)・柄渠觚(へここ)と曰(い)う。千余戸有り。世(よ)よ王有り。皆、女王国に統属す。(帯方)郡使往来するとき、常に駐(とど)まる所なり」

それに対し、『翰苑』は魚豢の『魏略』を引用して、

「東南五百里にして 伊都国に到る。戸(一)万余。官を置きて爾支(にぎ)と曰(い)い、副を洩溪觚(えけこ)・柄渠觚(へここ)と曰(い)う。其の国の王、皆女王に属す」

と記している。

『魏志倭人伝』と『魏略』の比較

項目	『魏志倭人伝』	『魏略』
末盧国から	東南陸行五百里	東南陸行五百里
戸数	千余戸	(一)万余戸
長官	爾支(にき)	爾支
副官	泄謨觚(しまこ)	洩溪觚(えけこ)
	柄渠觚(へここ)	柄渠觚(へここ)
伊都国王	世(よよ)王有り	国王
邪馬台国との関係	女王国に統属	女王に属す
帯方郡の使者来航時	常駐	—

『魏志倭人伝』と『魏略』が決定的に異なるのは伊都国の戸数である。

「千余戸」と「(一)万余戸」と10倍の開きがあり、いずれかが誤っていることは明らかである。

平安時代に編纂された『和名抄』に郡ごとの郷名が記されている。戸数と郷数は人口に比例する。時代の異なる二つの指標を比較するのは多少問題かもしれないが、大まかな傾向はつかめるであろう。この二つの指標を比べると次のとおりとなる。

国名	『魏志倭人伝』	『魏略』	『和名抄』	C/A ×100	C/B ×100
	戸数(A)	戸数(B)	郷数(C)		
対馬国	1,000		9	0.90	
壹岐国	3,000		11	0.37	
末盧国	3,000		5	0.17	
伊都国	1,000	10,000	8(志摩郡を除く)	0.80	0.08
奴国	20,000		22(那珂 9・席田 3・御笠 4・早良 6)	0.11	
不弥国	1,000		9(糟屋)	0.90	
投馬国	50,000		—		
邪馬台国	70,000		—		
計	150,000				

『魏略』の一万戸は C/B=0.08 とイレギュラーな数値をしめしており、『魏志倭人伝』の千戸は C/A=0.80 と対馬・不弥国とほぼ同等の数値をしめしていることから、『魏志倭人伝』の「千余戸」の方に軍配が上がる。

対馬は面積が広いわりに農業人口が少ない漁業の島である。不弥国も漁業者ないし海人族の占める割合が多かったのであろう。

伊都国は一種の袋状の地勢で、東西と南の三方向を山で閉ざされ、北側は玄界灘に面してい

る。奴国(福岡平野)のように、南方の筑紫平野と直接通じる平坦地を有していない。外界と通じるには船を用いた方がはるかに便利で、対馬や不弥国とおなじく漁業者ないし海人族の占める割合が多かったのであろう。

反面、陸側から攻撃されにくい優位性を備えているといっている。

千戸×5人=5,000人程度の小さなクニではあったが、卑弥呼はこの伊都国の地政学上の優位性に着目したのであろう。他の倭人伝のクニグニとはまったく異なる役割をあたえている。

『魏志倭人伝』は、次のように記している。

- 「女王国自(より)以北には、特に一大率(いちだいそつ)を置きて、諸国を檢察せしむ。諸国これを畏揮(いたん)す。(一大率は)常に伊都国に治す。國中においては刺史(しし)の如きもの有り」
- 「(倭)王の使いを遣わして、京都(けいと)・帯方郡・諸(もろもろ)の韓国に詣(いた)らしむるとき、及び(帯方)郡使の倭国に使いするときは、みなが津に臨みて搜露(そうろ)し、文書、賜遺(しい)の物を伝送して女王に詣(いた)らしめ、差錯(ささく)あることを得ず」

#### 一大率(いちだいそつ)の配置

卑弥呼は、伊都国に諸国を監察する一大率を配置した。

一大率は中国の「刺史(しし)」のごとく諸国を監察し、諸国はそれを恐れ憚った。末盧国はもとより、壹岐国と対馬国なども取り締まったであろう。朝鮮半島の動向も監視したかもしれない。

一大率は、諸国に配置された卑狗や卑奴母離などよりも強大な権限を有し、専用の官船と乗組員・武装兵卒などを保有していたにちがいない。

ただし、一大率が伊都国——糸島市のどこに拠点を置いていたのか、まったくわかっていない。

何より、卑弥呼によって任命された一大率の名前も、卑弥呼との関係についても、『魏志倭人伝』にはまったく記されていない。

#### 伊都国は女王国の北

なお、『魏志倭人伝』は、伊都国は「女王国より以北」と記す。——つまり、伊都国の南に女王国(邪馬台国)があったことになる。

伊都国の南といえば、脊振山地を隔てて、筑紫平野に属する佐賀平野が広がっている。

佐賀市から8キロ東方には、吉野ケ里遺跡がある。

『魏志倭人伝』の記す里程記事では、末盧国・伊都国・奴国・不弥国を経て、「南、邪馬台国にいたる。女王の都(みやこ)するところ」と記している。これからみても、伊都国を含む玄界灘沿岸地域の南側——筑紫平野に邪馬台国があったことになる。

#### 女王国以北のクニグニ

さらにいえば、『魏志倭人伝』は、

「女王より以北は、その戸数・道里は略載するを得べし」  
とも記している。



戸数・道里の概略が記されているのは、対馬国・一支国・末慮国・伊都国・奴国・不弥国である。これらのクニグニは「女王国の以北」にあった。

この記事もまた、伊都国を含むクニグニの南の筑紫平野に女王国があったことを指し示している。

吉野ケ里を含め、筑紫平野における邪馬台国の都の候補地については、それほど遠くない時期にまとめて述べる 때가訪れよう。

### 爾支(にき)

下表のとおり、卑弥呼は伊都国に長官として「爾支」、副官として「泄謨觚」と「柄渠觚」という2名を配置した。

爾の上古音は「nier」、支は「kieg」であるから、「爾支」は「にき」と読めるであろう。

泄謨觚は「しまこ(siat-mag-kuag)」、柄渠觚は「ひ(び)ここ(pi ā ŋ-giag-kuag)」のような読み方であろうか。

いずれにしろ、邪馬台国のクニグニのうち、副官2名体制というのは伊都国だけである。

しかも、卑狗(日子)や卑奴母離(日守)ではなく、「爾支(にき)」という伊都国だけにみられる官名である。

邪馬台	投馬	不弥	奴	伊都	末慮	一支	対馬	国名
伊支馬	弥弥	多模	兜馬觚	爾支		卑狗	卑狗	官
弥馬升	弥弥那利	卑奴母離	卑奴母離	柄渠觚 泄謨觚		卑奴母離	卑奴母離	
弥馬獲支								名
奴佳鞆				一大率				

「にき」は「稲置(いなぎ)」であるとする説(内藤湖南)、「ぬし」と読み「県主(あがためし)」とする説(山田孝雄)などがあるが、卑狗(日子=彦)や卑奴母離(日守)の「日=太陽」にくらべると、スケールが小さく、風格も感じられない。

「爾支(にき)」は、神社の宮司を補佐する神職名の「禰宜(ねぎ)」とする説もあるが、そもそも「ねぎ」の意味がよくわからない。

ところで、天照大神の孫にニニギミコトとニギハヤヒという兄弟がいる。父は天照大神の子の天

忍穗耳尊、母は高皇産靈尊の娘の万幡豊秋津師比売命(栲幡千千姫命)である。

ニニギノミコトは日向の高千穂に天降り(いわゆる天孫降臨)、ニギハヤヒは神武天皇に先立って近畿に東征した人物である。

二人とも「ニギ」を共有している。

この「ニギ」と『魏志倭人伝』の「爾支(にき)」、あるいは神職の「禰宜(ねぎ)」と何か関係があるのではないかという推測も成り立つかもしれない。

次表のとおり、ニニギノミコトのニギは、「瓊杵」、「邇芸」などと表記され、ニギハヤヒのニギは、「饒」、「邇藝」、「丹杵」などと表記されている。

### ニニギノミコトとニギハヤヒの表記

ニ ニ ギ ノ ミ コ ト	天津彦彦火瓊瓊杵尊	(あまつひこ・ひこほの・ににぎのみこと) 『日本書紀』本文、第一の一書、第二の一書
	天津彦国光彦火瓊瓊杵尊	(あまつひこ・くにてる・ひこほの・ににぎのみこと) 『日本書紀』第九段第四の一書
	天津彦根火瓊瓊杵尊	(あまつひこね・ほの・ににぎのみこと) 『日本書紀』第九段第六の一書
	火瓊瓊杵尊	(ほの・ににぎのみこと) 『日本書紀』第九段第六の一書、第七の一書
	天之杵火火置瀬尊	(あめのぎ・ほほぎせのみこと) 『日本書紀』第九段第七の一書
	天杵瀬命	(あめのきせのみこと) 『日本書紀』第九段第七の一書
	天饒石国饒石天津彦彦火瓊瓊杵尊	(あめにぎし・くににぎし・あまつひこ・ほのににぎのみこと) 『日本書紀』第九段第八の一書
	天邇岐志国邇岐志天津日高日子番能邇邇芸命	(あめにぎし・くににぎし・あまつひこ・ひこほの・ににぎのみこと) 『古事記』
	天津日高日子番能邇邇芸命	(あまつひこ・ひこほの・ににぎのみこと) 『古事記』
	天津日子番能邇邇芸命	(あまつひこ・ほの・ににぎのみこと) 『古事記』
日子番能邇邇芸命	(ひこほの・ににぎのみこと) 『古事記』	
ニ ギ ハ ヤ ヒ	饒速日命	(にぎはやひのみこと) 『日本書紀』
	邇芸速日命	(にぎはやひのみこと) 『古事記』『先代旧事本紀』
	天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊	(あまてる・くにてるひこ・あまのほあかり・くしたま・にぎはやひ) 『先代旧事本紀』
	天火明命	(あまのほのあかりのみこと) 『先代旧事本紀』
	天照國照彦天火明尊	(あまてる・くにてるひこ・あまのほあかりのみこと) 『先代旧事本紀』
	胆杵磯丹杵穗命	(いぎしにぎほのみこと) 『先代旧事本紀』

「ニキ」あるいは「ニギ」は、「爾支(にき)」に通じる可能性があるものの、やはり、その意味は不明である。

ただし、上表をよく見ると、ニニギミコトの名の前に「火(ほ)」あるいは「番(ほ)」が置かれているケースがほとんどであることに気づく。ニギハヤヒの場合も、「火明」と表記されている。

「ニキ」ないし「ニギ」は、「火」と何らかの関係があるのではないか。

「火」はまた、「日」に通じている。

卑狗(日子・彦)と卑奴母離(日守)は「日」を祭ることに由来し、爾支(にき)もまた「火」ないし「日」を祭ることに由来するのではないか。——と、ここまでどうにか推測できたとしても、「爾支(にき)」と「火」ないし「日」を直接結びつける言語学的材料を持ち合わせていないため、これ以上の推測は困難である。

「爾支(にき)」が、「火」ないし「日」と結びつくような方言ないし古語を御存じの方がおられたら、ぜひとも御一報いただきたい。

### 泄謨觚と柄渠觚

なお、前述のとおり、伊都国には長官の「爾支(にき)」のほか、「泄謨觚(しまこ)」と「柄渠觚(ひここ)」という副官 2 名が配置されていた。

泄謨觚は「島彦(日子)」、柄渠觚は「彦(日子)子」、と読めないでもない。

旧志摩郡に接した海側を「泄謨觚＝島彦」が管轄し、伊都国の内陸側を「柄渠觚＝彦子」が管轄した可能性も考えられようが、これまた勝手な推測に過ぎない。

古代史を論じようとする、たちまち霧が立ち込めてくるが、それでも時折生じる晴れ間を期待しながら、ひたすら前に進むしかない。

### 世(よよ)王有り

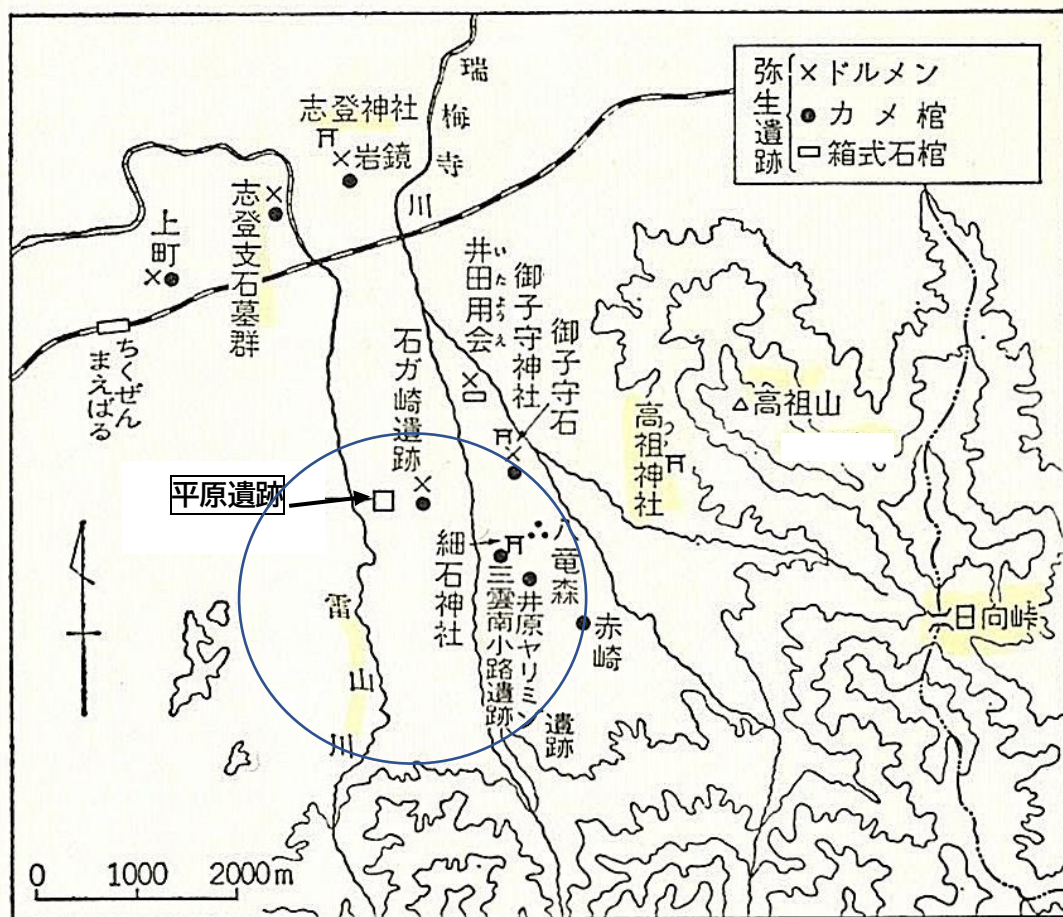
なお、『魏志倭人伝』は、伊都国についてのみ「世(よよ)王有り」と記している。

逆にいえば、対馬国、壱岐国、末盧国、奴国、不弥国、投馬国などのクニグニは、伝統的な王が廃され、一大率が直轄したとおもわれる末盧国を除き、卑弥呼が派遣した長官・副官によって統治されていたのであろう。

「世(よよ)王有り」を実証するように、雷山川・瑞梅寺川流域に三雲南小路遺跡と井原ヤリミゾ遺跡という伊都国の王墓がある。

		末盧国	伊都国	奴国	早良域	嘉穂域	筑紫野域	朝倉域	佐賀域
前	期 末	菜畑	曲り田	板付田端	↑ 吉武高木 吉武大石				
中	初 頭	宇木汲田 柏崎	三雲	須玖岡本	↓	鎌田原	隈・西小田 第2・3地点 第13地点	峯	↑ 吉野ヶ里
	前 半								
後	期 中								
	後 半		平原						↓

北部九州における弥生時代中期～後期の有力者およびその集団墓（小田富士雄作）





三雲南小路遺跡は紀元前 1 世紀後半、井原ヤリミゾ遺跡は紀元後 1 世紀後半～2 世紀初頭の——邪馬台国時代に先立つ奴国の時代の王墓である。

そして、奴国の時代で紹介したように、三雲南小路 2 号墓のカメ棺に奴国の一の谷型カメ棺が採用されていることから、伊都国王は奴国王の親族であったとみられている(『弥生・古墳文化の研究』井上裕弘・梓書院)。

### 平原遺跡

平原遺跡は、昭和40年(1965)雷山川と瑞梅寺川にはさまれた曾根丘陵からミカン園の造成中に発見された。

多数のガラス片とともに、直径 46.5 センチの巨大な内行花文鏡が破碎された姿で出土し、原田大六氏(1917～1985)を主任調査員として福岡県教育委員会による調査がおこなわれた。

王墓とみられる 1 号墓は、東西約 14 メートル、南北約 10.5 メートルの長方形の方形周溝墓で、出土した遺物などから弥生時代後期中頃——3 世紀前半ごろの邪馬台国時代にきわめて近い時代と推定された。

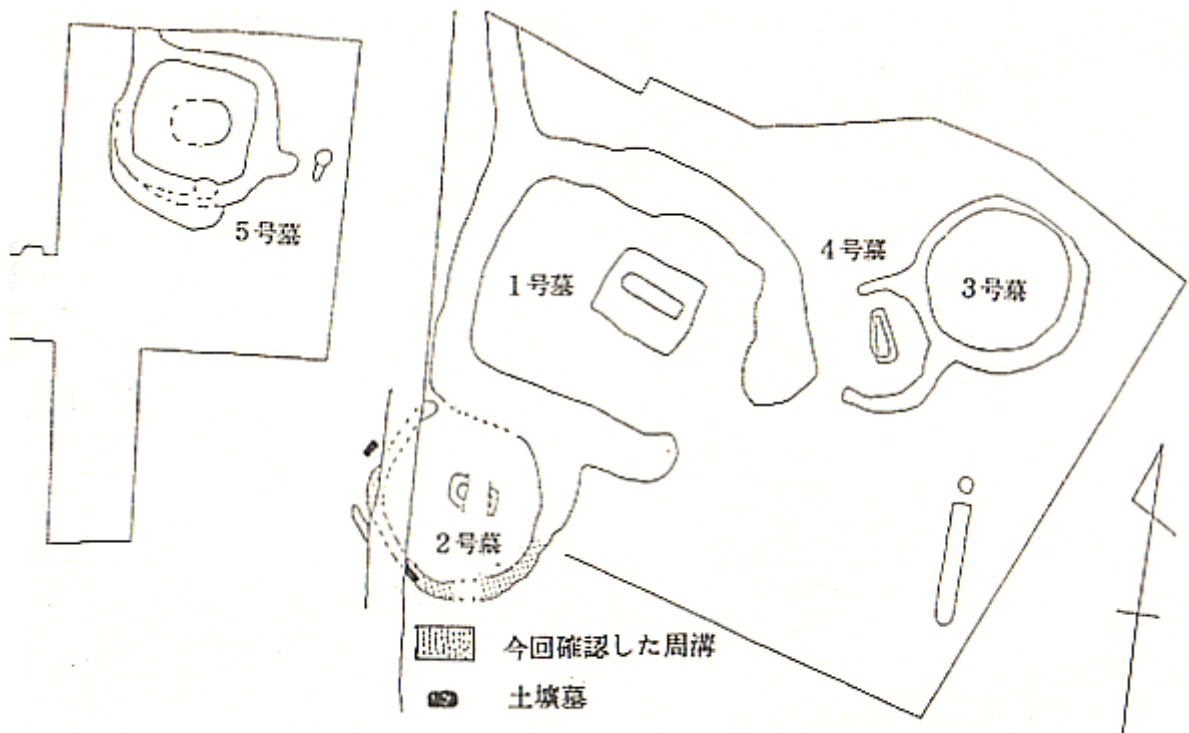
墓の周囲には幅 1.5 メートルから 3.3 メートル、深さ 30 センチから 10 センチ程の周溝があり、中心部には、長さ 3 メートル、幅 90 センチメートルの割竹形木棺(丸太を半分に割り、中をくり抜いて再び合わせ棺としたもの)が埋納されていた。



副葬品のなかに破碎した銅鏡片が多数あり、この破片を復元し 39 面(のち 40 面)とした。

1つの墳墓から出土した銅鏡の枚数としては日本最多である。

勾玉や管玉などの装飾品が多く、武器類が少ないため、原田大六氏は、埋葬された人物は「女性」と推定した。



平原遺跡遺構配置図（「平原遺跡発掘調査中間報告」1998）

平原遺跡副葬品一覧

	銅鏡	武器	玉類・その他	年代
1号墓	前漢鏡2(中型) 後漢鏡32 (大型6、中型27) 仿製鏡5 (ほつせいきょう) (超大型4, 大型1)	素環頭太刀1	ガラス勾玉 3 ガラス管玉 約20 ガラス小玉 600以上 赤メノウ管玉 12 蛋白石丸玉 約500 (たんぱくせきまるだま) 蛋白石耳 玉當1	弥生後期後半 ～ 弥生終末
2号墓	前漢鏡2 + α (中型1, 小型1)			弥生後期前半

(注)：銅鏡の分類については柳田康雄氏の分類による。  
：超大型……直径40cm以上、大型……20cm以上、  
中型…… # 13cm以上、小型……12cm以下

そして、原田大六氏は「大型内行花文鏡(内行花文八葉鏡)」をその「文様」と「大きさ」から「八咫の鏡」と推定するとともに、被葬者を天照大神とした。

大型内行花文鏡が八咫の鏡であることについては、原田氏の指摘するとおりであろう。

「咫(あた)」は、古代中国の長さの単位である。『説文解字』には、「中婦人手長八寸、謂之咫。周尺也」とある。「周代の尺で女性の手の長さ8寸を咫という」という意味である。

すなわち、8寸=0.8尺=1咫(あた)となる。

男性の手を広げたときの親指と中指の間の長さが1尺の起こりで、女性の指は男性よりも短いことから、0.8尺とされたとみられる。ちなみに、漢代の1寸は約2.3センチで、1尺は約23センチとなる。平原遺跡の大型鏡の直径は46.5センチであるから、半径は約23センチ=1尺ということになる。仮に円周率3.2で計算してみると、下記のとおりとなる。

	半径	直径	円周率	円周	×1.25
平原大型鏡	1尺	2尺	(3.2)	6.4尺	8咫

半径1尺、直径2尺、円周6.4尺=8咫となる。



10号鏡 直径46.5 cm、内行花文八葉鏡

なお、奥野正男氏は卑弥呼の墓とし、最近では安本美典氏もこれに同調されているが、箸墓を卑弥呼の墓とみる近畿説と同じく、直接的証拠に基づかない単なる主観的判断に過ぎないといえよう。

卑弥呼の墓であるかどうかについては、その判断基準の設定とその基準に基づく厳密な判断が必要である。



**【判断基準①】卑弥呼の墓は「径百余歩」の規模であること。**

後漢・魏の時代の「一步＝六尺」で計算すると次のとおりとなる。

時代	一寸	一尺	六尺	×100	備考
後漢	2.30 cm	23.03 cm	1.382m	138.2m	140～150m
魏	2.41 cm	24.12cm	1.447m	144.7m	

- ・基本的には直径 140～150mの円墳とみるべきであろうか。
- ・ただし、近畿説では前方後円墳たる箸墓の後円部直径約 150メートルを「径百余歩」とみるなど恣意的に運用されているので、この判断基準①のみで決定することは適切でない。
- ・平原遺跡の1号墓は、東西約 14メートル、南北約 10.5メートルの長方形の方形周溝墓であるため、判断基準①に該当しない。曾根丘陵に恣意的に範囲を広げることは許されない。
- ・吉野ヶ里遺跡の北墳丘墓についても、南北40メートル、東西27メートルの規模であるため、判断基準①に該当しない。

**【判断基準②】卑弥呼の墓の周辺に「殉葬者奴婢百人余」の殉葬墓があること。**

『魏志倭人伝』の記事からみて当然の判断基準であろうが、卑弥呼の墓からどの程度の距離にどのような形態で存在するのか、そもそも殉葬墓が本当に存在するのかなど、実際の運用に当たっては難しい課題が予想される。しかしながら、判断基準①に適合した墓の周辺に約 100名の殉葬墓が確認できれば決定打になる可能性を秘めている。

**【判断基準③】親魏倭王の金印など魏の皇帝から授与された品々が出土すること。**

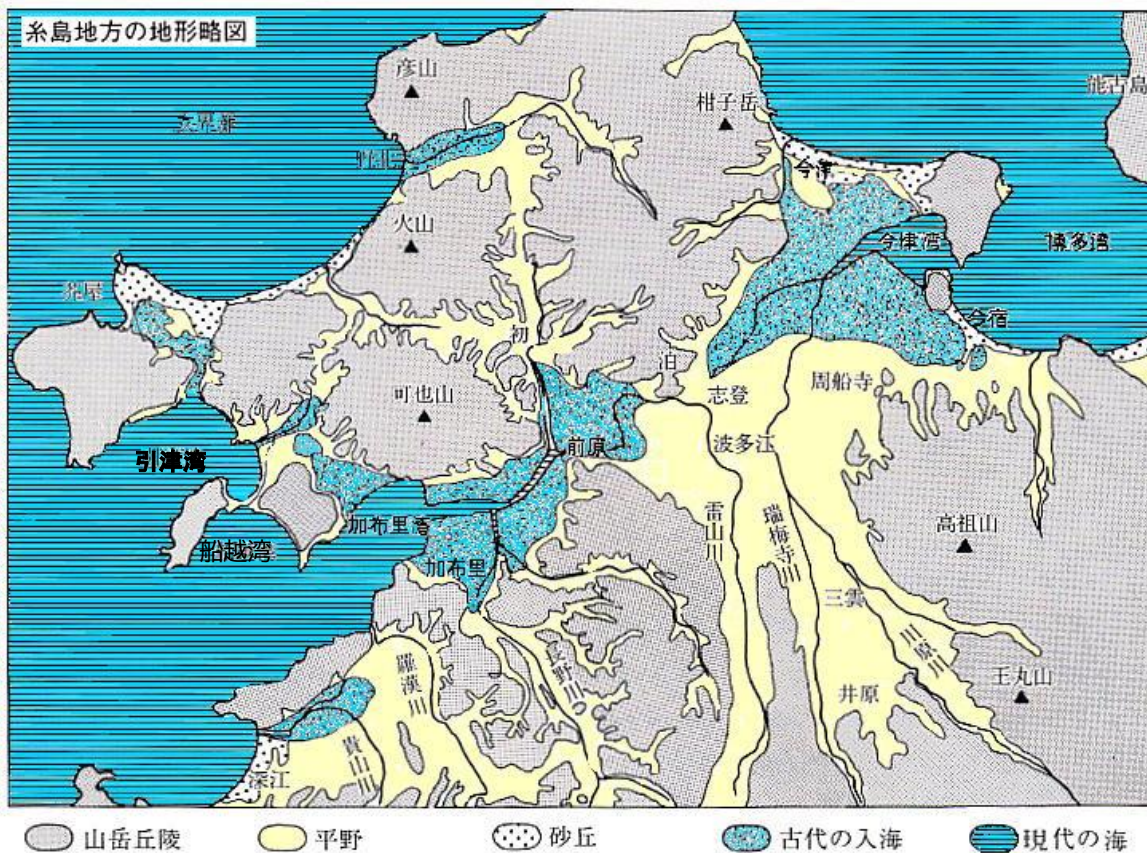
- ・卑弥呼に授与された親魏倭王の金印や銀印青綬、紺地句文錦、細班華鬪、白絹、金八両、五尺刀二口、銅鏡百枚、真珠、鉛丹および絳地交龍錦、絳地縹粟鬪、倩絳、紺青などの品々
- ・魏から授与された可能性が高い品々(大分県日田市出土の金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡など)  
ただし、三角縁神獸鏡について魏鏡説と国産説が対立していることなどをみても、科学的水準の高度化が急務である。
- ・近畿以外から出土した場合、安易な近畿からの流布説あるいは授与説が唱えられる可能性が高いので、「出土地優先主義」の原則を徹底する必要がある。

**【判断基準④】卑弥呼と特定できる文書が出土すること。**

- ・期待は薄いですが、魏の皇帝の詔書や帯方郡からの連絡文、卑弥呼の返書の写しなど、卑弥呼と特定できる文書類などが出土すれば決定的であるが、これまた近畿以外から出土した場合に近畿からの流布説あるいは授与説が唱えられる可能性が高いので、「出土地優先主義」の原則を徹底する必要がある。

以上四つの基準で判断すれば、平原遺跡は卑弥呼の墓ではなく、伊都国王の墓である可能性が高いとみるべきであろう。

## 伊都国に入る



### 加布里(かぶり)湾

海に突き出た半島部分を糸島半島(志麻郡)といい、内陸部が伊都国(怡土郡)である。

その間に湿地帯——中通低地があった。糸島水道があったという人もいる。

東西から大きく海が入り込む地形ではあったが、上図をみてもわかるとおり、泊から志登にかけて水道は遮断されていたようである。

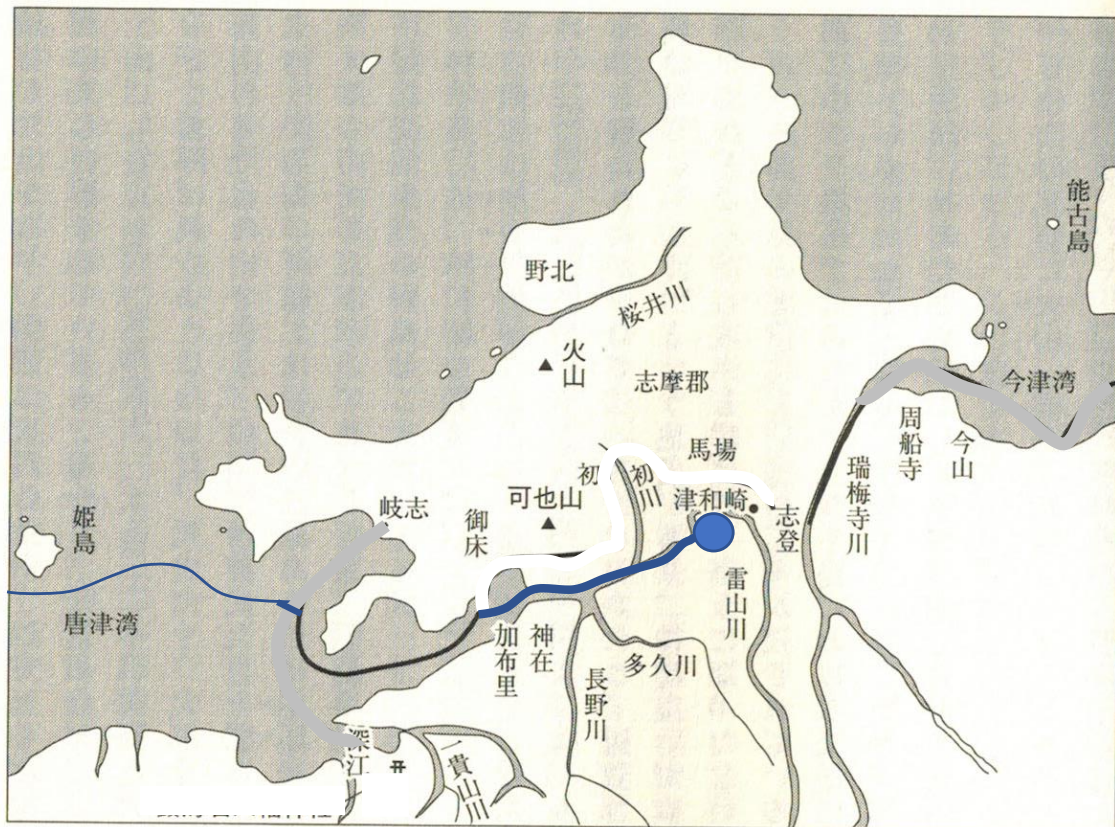
唐津方面からやってきた帯方郡の船は、倭人の船に案内されて、おそらく加布里湾に入港したであろう。

### 可也(かや)山

左手に可也山(365.1メートル)がそびえている。可也山は南北約2キロ、東西約4キロの裾野を持つ独立した山であり、山頂は東西に長く、四方とも急斜面の美しい形をしているところから、後世になって、「糸島富士」「小富士」「筑紫富士」などとも呼ばれるようになった。死火山で、大部分は花崗岩でできた山である。山頂には神武天皇を祭る可也神社がある。

可也とは、もちろん朝鮮の加羅(から)あるいは加耶(かや)に由来するものであろう。

朝鮮半島との密接な交流をうかがわせる。



### 加布里(かぶり)

ちなみに、加布里湾に面した加布里は、「かぶり」とも呼ばれ、「冠」とも書かれた。16世紀後半に中国・明で編纂された『類書』(百科事典)の「図書編目本国序」には、「加菩里」と書かれている。

地名の由来については、吉備真備がこの地を訪れたとき、冠を石の上に置いたからであるとか、石が冠に似ていたためであるという(『糸島郡誌』)。

しかしながら、「かぶり」という地名は、おそらくもっと古く、「郡(こほり)」と同源の語であろう。郡の規模は、国よりは小さく、里・郷よりも大きい。『日本書紀』の孝徳天皇大化二年(646)の条に、「およそ郡、四十里をもって大郡となし、三十里以下、四里を中郡となし、三里を小郡となす」とある。

一定規模の集落を指す朝鮮の「評(こほり)」が日本に伝わったのかもしれない。

糸島の加布里という地名が最も古い「かぶり」であった可能性もある。

そう考えれば、志摩半島の「志摩」も、「島」という語の発祥の地かもしれないし、「いつく(斎)」、「いむ(忌)」、「いつ(巖)」などの祭祀と関連のある語もまた、もともと「伊都」で行われた祭祀が一般化し、いわば標準語化していったのかもしれない。

### 御床(みとこ)

可也山の南西麓に御床がある。地名の由来は、746年大宰府に観世音寺を建立した際、本尊の阿弥陀像を中国から運んできたが、この地に鉄の床を敷いて阿弥陀像を安置したところから御床という地名が生じたという。

しかしながら、この地は古くから開けていたところで、沖田川を挟む砂丘上に、縄文時代前・中期及び弥生時代中・後期の御床松原遺跡がある。

とりわけ、この御床松原遺跡で注目すべきは、中国・新の王莽(前 45～後 23)が紀元 14 年に発行した貨泉が出土したことである。貨泉 25 枚が貨布 1 枚に相当する。貨泉は円形に四角い穴のある銅銭で、穴の右に貨、左に布泉と刻まれている。貨布も銅銭で、長さは新の小尺で二寸五分(約五・六センチ)、右に貨の字を、左に布の字を刻んでいる。

御床松原遺跡の貨泉は、大正六年(1917)に九州大学の中山平次郎博士によって発掘されたものであるが、壱岐の原の辻遺跡や韓国の濟州島からも発見され、現在までに 30 遺跡から 70 数枚が見つかっている。

また、貨布は昭和五十六年(1981)に福岡県大野城市の仲島遺跡から初めて出土した。邪馬台国以前の奴国の時代における大陸との交流を示すものである。

### 初(はつ)

加布里湾をさらに進むと初がある。

明治中期までは「波津」と書かれた。初は小さな集落ではあるが、志摩半島における海陸交通の要衝として、広域合併前まで志摩町の役場が置かれていた。

### 泊(とまり)

さらに進むと、泊(とまり)である。中国・明時代の『図書編』(百科事典)には「多売利」とある。

その名のとおり、船舶が停泊したところから泊(とまり)という地名になったという。

弥生時代の疋田遺跡・泊遺跡もあり、この土地もまた古い時代から開けていた地域であった。

泊(とまり)のすぐ近くには志登(糸島市)がある。西の唐津湾方面に流れる雷山川と東に流れる瑞梅寺川にはさまれ、いわば伊都国の海の玄関口に位置している。いまでは豊玉姫を祭神とする志登神社があるが、もとは二つの川にはさまれた湿地帯に浮かぶ小さな島であったらしく、浮島とも呼ばれた。

帯方郡の船は、倭人たちの船に案内されて、加布里湾を進み、泊(とまり)あたりで停泊して上陸し、志登(しと)を通過して伊都国の中心地に向かったであろう。

### 斯馬(しま)国=旧志摩(しま)郡

『翰苑』は郭義恭の『広志』を引用して、伊都国や邪馬台国への距離などを記し、つづけて前述した平戸方面の伊耶(いや)国について記すとともに、その見出しとして、

「伊都に届(いた)り、傍(かたわら)、斯馬(しま)に連なる」

と、伊都国と斯馬(しま)国が隣り合っていると書きとどめている。

もとより糸島市は、怡土(いと)郡と志摩(しま)郡を合わせた名称で、まさに隣り合っている。

## 岐志(きし)

志摩郡西部の引津(ひきつ)湾に面した岐志(きし)は、これまた日本語の「岸」の発祥の地であるかもしれない。

奈良・平安時代、岐志付近にあった引津の亭に遣唐使たちが宿泊したという。

## 火山・彦山

前述した可也山の北側に火山(244.1メートル)がある。

「しらぬひ山」とも呼ばれるが、神功皇后がこの山に登り山頂で火を上げたという(『筑前国続風土記』)。火山の山頂に烽火台が置かれていたのであろう。

そして、野北の海際には、彦山(231.7メートル)がある。かつては日子山と書かれた。豊前の英彦山とおなじく天照大神の子の天忍穗耳尊を祭っている。

## 今津湾

また、東側の今津湾は能古島にふさがれた天然の良港である。博多湾とつながっている。

西からの風と波が強いときには、今津湾に避難すれば安全であろう。

このように、志摩郡——斯馬国は、伊都国の海側を守る要衝の地であり、おそらく実質的に伊都国の管轄下に置かれ、伊都国と一体的に統治されていたはずである。

## 邪馬台国へ向かう

伊都国に到着した帯方郡の使者たちは、末盧国から陸路で伊都国に到着した役人らと合流し、魏の皇帝からの品々を陸揚げしたのであろう。

そして、『魏志倭人伝』が書いているとおり、

「帯方郡の使いが倭国に行くときはみな、港で荷物を改め、文書・贈り物などにあやまりがないか確かめて女王に差し出し、不足や食い違いは許されない」

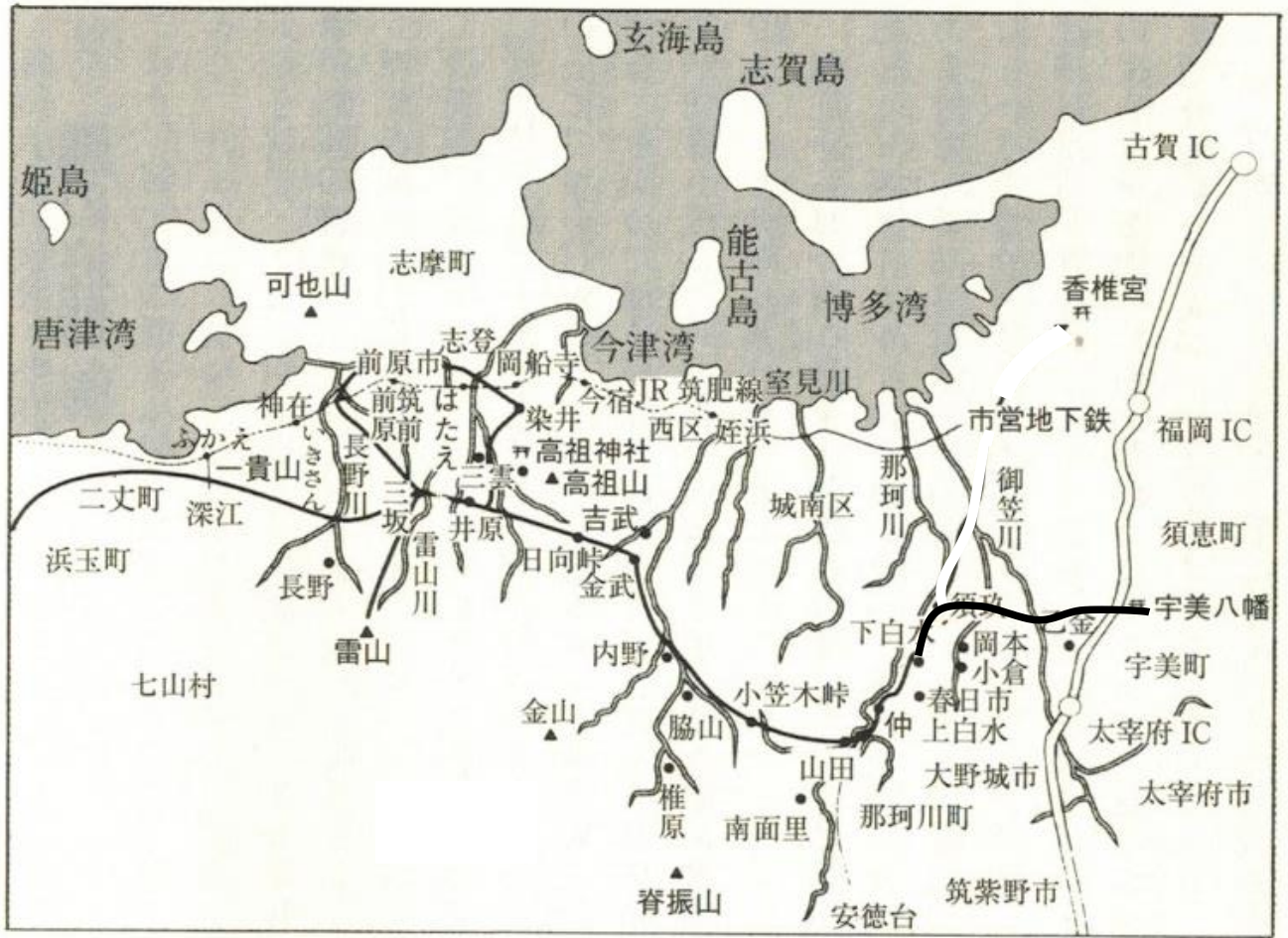
と、一大率の監視のもと、倭の役人たちから厳重な検査を受けたにちがいない。

そののち再び厳重に荷造りされた品々は、神輿(みこし)に積み込まれたであろう。荷車はいまだ普及していなかったはずである。草木が生い茂った狭い道路を運ぶには、神輿(みこし)のほうが安全確実である。

帯方郡の使者たちは、船舶の警固および補修などのため一部の船員を残して、倭人の一行とともに、伊都国を出発したのであろう。

次の目的地は奴国で、その次は不弥国である。

そのむこうが、目的地の邪馬台国である。



(以下、次号につづく)

## 河村哲夫(かわむら・てつお)

1947年(昭和22)年福岡県柳川市生まれ。  
九州大学法学部卒  
歴史作家、日本古代史ネットワーク副会長  
福岡県文化団体連合会顧問  
ふくおかアジア文化塾代表  
立花壱岐研究会会員  
元『季刊邪馬台国』編纂委員長  
西日本新聞 TNC 文化サークル講師  
朝日カルチャーセンター講師  
大野城市山城塾講師



### 〈おもな著作〉

- 『志は、天下～柳川藩最後の家老・立花壱岐～(全5巻)』(1995年海鳥社)
- 「小楠と立花壱岐」(1998年『横井小楠のすべて』(新人物往来社)
- 『立花宗茂』(1999年、西日本新聞社)
- 『柳川城炎上～立花壱岐・もうひとつの維新史～』(1999年角川書店)
- 『西日本古代紀行～神功皇后風土記～』(2001年西日本新聞社)
- 『筑後争乱記～蒲池一族の興亡～』(2003年海鳥社)
- 『九州を制覇した大王～景行天皇巡幸記～』(2006年海鳥社)
- 『天を翔けた男～西海の豪商・石本平兵衛～』(2007年11月梓書院)
- 「北部九州における神功皇后伝承」(2008年、『季刊邪馬台国』97号、98号)
- 「九州における景行天皇伝承」(2008年、『季刊邪馬台国』99号)
- 「『季刊邪馬台国』100号への軌跡」(2008年、『季刊邪馬台国』100号)
- 「小楠と立花壱岐」(2009年11月、『別冊環・横井小楠』藤原書店)
- 『龍王の海～国姓爺・鄭成功～』(2010年3月海鳥社)
- 「小楠の後継者、立花壱岐」(2011年1月、『環』藤原書店)
- 『天草の豪商石本平兵衛』(2012年8月藤原書店)
- 『神功皇后の謎を解く～伝承地探訪録～』(2013年12月原書房)
- 『景行天皇と日本武尊～列島を制覇した大王～』(2014年6月原書房)
- 『法頭の旅・ブッダへの道』(2012～2016年『季刊邪馬台国』114号～124号に連載)

### (テレビ・ラジオ出演)

- 平成31年1月NHK「日本人のおなまえっ！ 金栗の由来・ルーツ」
- 平成28年よりRKBラジオ「古代の福岡を歩く」レギュラー出演